

# 『日本近代文学の起源』の視角について【一】

——第一次、第二次「漱石試論」との相関——

向 窪 督

## 一、柄谷氏の漱石論について

平成四年(92年)五月『群像』臨時増刊号は、柄谷行人氏の「漱石論」(第一部—子規から漱石へ、第二部—漱石のアレゴリー)を特集で掲載している。現在活躍中の著述家二人を取上げ、全誌面特集を組む文芸誌企画は、ごくまれな事例として注目される。

漱石に関しては、氏には、先行する「漱石試論」数編が知られるところであり、それらは、初期評論集「畏怖する人間」(68〜71年)所収の、「意識と自然—漱石試論(Ⅰ)」(69年)、「内側から見た生—漱石試論(Ⅱ)」(71年)に始まり、数年後、氏の思索の初期の中心をなす『マルクスその可能性の中心』所収の、「階級について—漱石試論Ⅰ」(77年)、「文学について—漱石試論Ⅱ」(78年)として、断続していた。

『日本近代文学の起源』は、それに連続する78年〜80年の論述を集成した著作である。

それら「試論」より十年以上を経た今回の論述は、はじめて「漱石論」とされたが、二部構成による論述構想は、かつての二次にわたる

「漱石試論(Ⅰ)」、(Ⅱ)、「漱石試論Ⅰ、Ⅱ」と同形式であり、その次第からは、テキスト読解を基盤として論述対象を読み解くことを主張する筆者の論的体質と、意識の底部で「漱石」論の容易な完結を拒む論的アプローチの姿勢がうかがわれる。

本題での私の論点は、『日本近代文学の起源』において提起された柄谷氏の見解の示唆を見据えることにあるが、氏の初期の二つの主要著作『マルクスその可能性の中心』と『日本近代文学の起源』の間に二次的に成立をみた「漱石試論Ⅰ、Ⅱ」が、後者の構想の先蹤をなしていること、及び、それが初発の「漱石試論(Ⅰ)」、(Ⅱ)の次の段階の視点を獲得していることが、まず前提的に注目に価する。そして、二十年の歳月を要して、「試論」が「論」として打ち出されたところには、おのずからその思索の氏にとっての根深さが感知される。

こうした「漱石」論の様相は、それだけで、柄谷氏の「日本近代文学」に関する論究が、つねに「漱石」を一つの核として展開してきたことをうかがわせるものだが、事実そこでの主要な立論は、これら論考との相関を歴然と示している。

また、この時をさしはさんだ二度の「試論」の成熟は、今回の「漱

石論」をより簡潔なものに仕上げているが、その経緯上での『日本近代文学の起源』成立の位置も、意義も、そのことで、くつきりと輪郭づけられる。そして、これらの経過に成った、氏の『日本近代文学の起源』の骨格と論旨は、直接的には、第二次目の「文学について―漱石試論Ⅱ」で、ほぼ確立されたものである。

『日本近代文学の起源』は、「漱石」を時代と文学的原質においてとらえることを基点とした思索であるが、氏は、それを焦点化し、「日本の近代の質と様相」「近代文学での觀念化現象」「文化の特異性に対処すべき普遍的な考察」といった新しい論展開を、そこで果している。

それを論ずるに先立って、私は、まず、これら二次にわたる「漱石試論」と、その相関及びそれらが『日本近代文学の起源』を成立させている所以について言及しなくてはならない。場合によっては、氏にわたる立論の忽せにできない根拠が、単に時代的思考を駆使した才走った所論として受け止められる不当性も生じ得るといった懸念から、氏の画期的な立論の肉体的ともいえる根拠が、これら漱石の「試論」に見られることを明確にして置きたいと考えるからである。それも、氏による最近の「漱石論」の安定した視点はもとより、第一次「試論」と第二次「試論」の間には、根本的ともいえる論的視角の転換がみられ、そのことを動因として『日本近代文学の起源』が立論されるに至ったことが、氏の言わば論的必然として浮かび上がってくるからである。

#### ◇第一次漱石試論(Ⅰ)、(Ⅱ)、について

#### ◆意識と自然―漱石試論(Ⅰ)

さて、第一次「試論」である『畏怖する人間』中の漱石試論(Ⅰ)「意識と自然」で、氏は、漱石のしばしば用語とし、生存意識の底部をなす「自然」がどう「意識」に働き、どう漱石文学に作用しているかについて論究する。

氏は、それが漱石の長編小説に主題のへ分裂ををもたらすものであることを指摘し、漱石自身へなまましい肉感としてへ存在論的な側面において感受していたへ人間関係と、個そのものの根底の見定めつかぬ力として「自然」を「意識」しつづけていたことを述べる。そして、その漱石の「意識」につきまとう自己のへ非實在感へ、へ自己の同一性・連続性を求めようとする生き方の倫理とのバランスを崩してしまうことを、漱石固有の構造上の問題としてとらえる。

へ漱石において、倫理的位相と存在論的位相は順接するのではなく、逆接し、へ主人公たちは本来倫理的な問題を存在論的に解こうとし、本来存在論的な問題を倫理的に解こうとして、その結果小説を構成的に破綻させてしまったへと、氏は作品主題のへ分裂への不可避性を解明する。へ漱石が凝視していたのはへ究極、個におけるへ生存を不可避に強いているへ正体の知れないものであって、へ漱石は人間の心理が見え過ぎて困る自意識の持主だったが、そのゆえに見えない何ものかに畏怖する人間だったへと「漱石」をとらえる。

氏は、『道草』の健三の過去の記憶に位置を占めるへ「其行き詰まりには、大きな四角な家が建つてゐた。家には幅の広い梯子段のついた二階があつた。其二階の上も下も、健三の眼には同じやうに見えた。廊下で囲まれた中庭もまた真四角であつた。へ不思議な事に、其広い宅には人が誰も住んでいなかつた。」へという幼時のひとつの情景を

引用し、へこの風景は、漱石が自己の生についても固有のイメージにほかならない。健三(漱石)がこういう幼時の記憶を保持しているのは、そこになんらかの意味を与えたからだ、その「意味」とは理由もなくすでに生存しているという存在感覚である、とし、へがらんとした淋しい光景がある。そしてその向うにはなにもない。この「淋しさ」は、ほとんど『「ころ」の先生をおそった「淋しさ」と同質である。それは人がいない淋しさではない。人間が生存しているということの理由のない孤独である、と登場人物の個の「自然」を解明する。それは、まさに漱石自身の「自然」の、存在していることの理由のない不安・怖れと通底するものに外ならない。自伝的作品『道草』を例に、氏は、論の主題である漱石の「自然」について次のように述べている。

「自分に始まり自分に終る」健三の意識を否定するのは、妻や姉や島田のような他者だけではない。それだけなら『道草』の世界は自然主義的にフィツカルだ。健三の自己完結的な意識をうちやぶり彼を曖昧模糊とした存在たらしめているのは、「自然」である。もとより、この「自然」は概念的に書かれていない。それはフィツカルなものを通してしかあらわれないのである。

意識にとつて自然とはなにか、漱石はこういう問いをもちやどんな抽象的な概念によつても問うていない。「自然」は自分に始まり自分に終る「意識」の外にひろがる非存在の闇だが、漱石はそれを神とも天ともよばない。あくまでそれは「自然」なのだ。なぜなら、漱石は超越性をもとの感触いにかえれば生の感触を通してしか見出そうとしなかったからである。

その上で氏は、へ『「明暗」は、『道草』を通過してのみ可能な世界である、と指摘して、へ『道草』のフィツカルな世界はメタフィツカルなもの感触にとりかこまれており、「始まり」と「終り」が大きな闇のなかに溶けこんでしまっている。「明暗」を浸しているのは、そういう闇だ、とし、それが、へ自己内部で『道草』的相対化を経ることにおいてへ現代の実質を具現している、と『明暗』を位置づける。さらに、へ『「明暗」もまた終末において(未完であるが)漱石の二重のモチーフを露わにしはじめるのである。しかし、漱石は『門』や『行人』や『「ころ」のようにこの小説を終了させたとは考えられない、とし、へ漱石が『明暗』において、「わが全生活」を「大正五年の潮流」のなかに注ぎこんだことは疑いがなく、そして、漱石にもう少しの寿命があれば、われわれは『明暗』のなかにある包括的な世界像をもつことができたかもしれない。そこから見たとき、漱石以後の文学と人間の分裂と喪失の形態がより明瞭に浮き彫りされるであろうことは疑いをいれない、と述べて、「畏怖する人間」漱石の「意識と自然」の顛末の延長線上に仮想される文学的可能性の途絶の意味の重大さを示唆して論を閉じている。

#### ◆「内側から見た生」―漱石試論(Ⅱ)

漱石文学の存立基盤として漱石自身の「意識と自然」の論究されたこの「漱石試論(Ⅰ)」が、へ初出稿を大幅に書き改め、漱石の存在の原質論として、最初の単行本『畏怖する人間』の冒頭を飾ったことは、氏の論究の基礎部分としての重要な意義を受けもつものであるが、氏は、試論(Ⅱ)においては、すでに方法的にこの域を抜け出て、漱石

読解の別視角を設定している。氏は、自ら「初版 あとがき」において主としてその視角を次のように解説している。

私が欲したのは、確かなものの輪郭であり構造である。確かなもののかたちを見出すためには、拡散する雑多なばやけた光を一点に凝縮して、太い光の束に変えるレンズが必要である。私がそれを「内的世界」にもとめたのは、一つは社会科学や文化史・文明史のカテゴリにもとづく安直な発想への反撥からであり、もう一つは、いろんな意味での実存主義的発想への嫌悪からだといえる。私は、たとえば「内的世界」をそれ自体として純化して考えることはできないかと思った。そのとき外界や歴史性を捨象してよいとみなしうるには、この純化された内的世界はいかなる条件をみたしていなければならないか。要するに、そこに「現実」の何ものも本質的に捨象されてはならないのである。出来映えはともかく、漱石試論で私がやるうとしたのはそういう試みだった。

存在論的に論究された漱石の「自然」にとどまらず、生きた漱石の「現実」を、合理的に整備され登録された思索形式や、時代的に通りのよい思考タイプを用いて解説することを拒みながら、「内的世界」に、生の集光レンズの役割をもたせようとするのが、氏のこの段階で選択した視角であったことを、氏はここで述べている。

この自己解説の核心は、試論(Ⅰ)「意識と自然」で述べた漱石の存在意識が、「内的世界」としてのどのような生を営んだかについて質的に把握しようとした試論(Ⅱ)「内側から見た生」への自身の論的根拠を語ったものである。

つまり、存在論的に漱石の意識の原質を追究した試論(Ⅰ)に対し、試論(Ⅱ)は、生存する漱石の意識の様相の本質を解明すべく設定された新たな視角であった。しかも、氏の「内的世界」をそれ自体として純化して考えることはできないかという論究テーマは、へそのと外界や歴史性を捨象してよいとみなしうるには、この純化された内的世界はへそこに「現実」の何ものも本質的に捨象されてはならず、さらに「現実」以上の濃密なりアリティがなければならないという、極めてストイックな視角であることを要した。この漱石の生存の質を高純度においてストレートに捕捉しようとする思いが、漱石をテクストとして読み解こうとする方向を求めて、試論(Ⅱ)「内側から見た生」を成立させたことがここに語られているわけである。

事実、氏のこれら漱石試論(Ⅰ)(Ⅱ)は、漱石の掘ってきたる存在の内的基盤と、生き続ける存在の内的様相とに向けられる二つの視角によってそれぞれ成立したといえるものであり、こうした重層的な視座の設定によって、明瞭に主題化された対象の論究を深める方法を、論的特質として、この時期に確立したと考えられる。

すでにその時点での自らの納得する方法的な視座の設定によって論究を進める試論(Ⅱ)「内側から見た生」においては、へ「私」自身から永遠に疎隔されているへ人間存在そのものについてのへ自己を他者としてでなく、いわば自己の内側からみようとすれば、どうなるだろうかという人間存在そのものについてのテーマを漱石の場合として、へぼくが漱石の『夢十夜』をここでとりあげるのは、夢のなかでは外界は遮断されており自己を内側からみるほかないからである。夢のなかでは自他を区別する反省意識はなく、内側からみた自己だけが露出

している。漱石という作家を外側からではなく、純粋に内側からみるにもっともふさわしいテクストは『夢十夜』をおいてない。なぜならそこには漱石自身の「内側から見た生」のほか何もないからだ」と、へまさに彼の生の暗喩である『夢十夜』をテクストとして漱石を読み解く課題に、氏は没頭するのである。

さて、『夢十夜』によって読み解かれた漱石の「内側から見た生」は、そのへ「第一夜」では死を、「第三夜」では生誕を意味しているが、へ死と生誕はこれらの「夢」のなかでほとんど区別されていない。のみならず「内側」から見たときには、死と生誕は一般に区別しえない」と氏は指摘し、漱石にへ社会的生においてはとうてい充たしえない自己実現を「死」の彼岸に志向する根深い傾向性」とへ生の徹底的な嫌悪の色濃いことを述べ、あわせて、へ「第四夜」「第五夜」「第十夜」などに共通した点は、絶壁であれ河岸であれ自分が渡ることができないでとり残されるとか、渡るのを拒むとかいった主題である。この深淵が象徴しているのはむろん「死」にほかならない」と、いずれにも抜き難い死の気配を示唆する。さらに「第二夜」に、へ漱石が自らの実存を「出口がない様な残刻極まる状態」のように感受していたことを見出し、これがへひとびとが漱石の鬱病とよんでいたもので、へ死にむかっても生誕以前にむかっても「出口」が閉ざされているときへ漱石の頼りになるのはただ幻影だけであつたこと作品への表れとして、『幻影の盾』でのへ意識の仮死によってしかかいまみられぬ幻影、『薤露行』でのロマンスのへ三角関係のほみ出し方がへ漱石の分裂意識をしめしていることを指摘し、へ『夢十夜』全体が示しているものが、へよりどころのない寂寥感であり、

あるいは自分自身への異和感である」と読み解いている。

さらに、へ漱石の自己存在の無根拠性を象徴しているような「第六夜」と、へあてどない営為と徒勞がより明瞭に示されている「第七夜」において、へ漱石の心的な基調となっているのは、こうした行先も帰る先もわからぬ漂流感であり、「第九夜」に読み取られるへ幼年期における家族解体の経験の影響は、へ一人で存在することの不安として漱石のへ根本的気分を醸成したものではないかと述べる。

そして、「第七夜」の夢については、

この夢の素材は留学の際の船旅であろうが、この無気味な幽霊船のイメージが象徴しているのはむろん漱石の生そのものであり、同時にまた明治日本の漂流感である。なぜなら、この船の乗客はほとんど異人で、「船に乗つてゐる事さへ忘れてゐる」ように呑気にみえるからだ。一人の異人が近づいてきて、星や海もみんな神の作つたものだ、お前は神を信仰するかと尋ねたとき、自分は空を見て黙っている。この異人にとって生はある確実なものに支えられているのに、自分には寂寥と虚無しかない。「死」以外にはそこからのがれる途はないのである。かくて自分は船から思いきつて海に身を投じるのだが、足が甲板を離れたとたん急に命が惜しくなる。

と、説明し、本文の

只大変高く出来てゐた船と見えて、身体は船を離れたけれども、足は容易に水に着かない。然し捕まへるものがないから、次第々々に水に近附いて来る。いくら足を縮めても近附いて来る。水の色は黒かつた。

そのうち船は例の通り黒い煙を吐いて、通り過ぎて仕舞った。自分は何処へ行くんだか判らない船でも、矢つ張り乗つて居る方がよかつたと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用する事が出来ずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波の方へ静かに落ちて行つた。という描述部分を引いて、へこれは「落下する夢」の典型であるが、そのなかに『坑夫』のモチーフがひそんでゐる。『坑夫』もまた自滅をはかつて地底においていく話だからだ」と説明しているが、このへ『坑夫』のモチーフへの氏の注目、のちの第二次「漱石試論」において一転した展開へのかかりを示すことは、後述のとおりである。

氏は、現実の心的経験でへ漱石が感じているのは、現実的な他者に対する異和ではなく、内側からみた彼自身の存在の異和である。すなわち、この世界に個体として存在することがすでに異和であり、それは個体が個体であるかぎり消滅することはない」と見ながら、へしかし、漱石が感じている異和はけつしてたんなる心的異常に帰せられるべきではない。漱石の「怯え」（自己縮小）は、彼がこの世界で卑小な部分性としてしか存在できないという感覚であり、彼はただ異常なほどにそれを苦痛と感じたにすぎない」と述べ、へ漱石は内側からこういう人間の条件を絶対的につきつめて、《意識》そのものの背反性に迫つた作家であると論じている。

そしてへ『夢十夜』全篇にみざる漱石の「暗さ」は、したがつて一言でいえば、この世界では個体は本質的な生存をゆるされないということである。外側からみてどんな進歩や開化があろうと、「内側から見た生」においてぼくらは依然『夢十夜』の世界に棲んでゐるのだ。

漱石の暗い洞察は、宗教や科学（精神科学をふくむ）によつてすりぬけてしまうことのできない問題にとどいており、また彼自身宗教にも科学にも重荷を預けようとはけつしてしなかつたのである」と漱石の生に受け止められたゆゆしい重さとそれに耐えることにおいて自己でありつづけたこの作家の内面姿勢を、見据えてゐる。これら漱石試論は、氏の自己に深くかわる「畏怖する人間」理解論であり、漱石の内面に向けられた原質探求論であつたといえる。

#### ◇第二次 漱石試論Ⅰ、Ⅱ、について

さて、単行本『マルクスその可能性の中心』は、七八年に上梓されたものだが、その著書中の同名の評論は、七四年三月〜八月号『群像』初出のものであり、同書の「あとがき」によれば、へ四年前のものを大幅に改稿した分であり、「序説」といふべきものである」といふ。さらに、ここに収められた「階級について―漱石試論Ⅰ」「文学について―漱石試論Ⅱ」他一篇について、氏は、へ本書には、マルクス論とともに日本文学に関するエッセイをいれている。私はそれらをすこしも区別してゐない。文学はあいまいで、哲学は厳密だなどということとはありはしない。哲学も結局は文学、すなわち言葉にほかならないからである」と記し、自身の著述の同根同位を表明している。

ただ、「階級について―漱石試論Ⅰ」は、原題を「地底の世界」として七七年に『文体』創刊号に、「文学について―漱石試論Ⅱ」は「漱石と文学」として七八年『国文学』五月号に初出したものを収録に際して改題したものである。ここには、自己の著述に関する氏の構想的自覚があると同時に、論的視角の轉換の気配が明瞭である。

少なくともその傾向として、自己の同時期の著述を、対象への論及角度や、表現の質の違いはあれ、自身の眼と文体による一つの表現事実として提示しようとする志向があること―それはそこでの支柱となる著述を裏付け、或は逆にその主旨を十全に布衍する編纂的な志向でもある―といっても、それは氏の「趣向」というべきものではない。

氏にとって、自分が何について語るべきかという思索の中核は明瞭であつて、それに世界への自身の諸視点を糾合して自己を確かめる論究しか、氏が情熱を示さないことははっきりしているからである。脳裏のあらゆる思想の蓄積がテーマに呼び寄せられるかと思えば、テーマを核としてあらゆる位置、位相へと実感が飛び移り、各思想と緊密に結びつく。それが氏自身の思索の領域をなし、明晰な論究となる。ここでは、明晰な理論と、いかにしても拘い取れないものが必然として残され、明快な対比で選別されて示される。そして、いかにしても概念化し質化して示し得ないもの、或はそうすべきでないものの本質を見透し、方法的に的確な位置を与えた高次な明晰さとして、テーマ化する。氏の活用する暗喩による主題表現がそれであるが、いまそのことは後述に委ねるとして、この時期の氏の思索において、まさに中心を占めていた「マルクスその可能性の中心」―マルクスをテキストとして読み解くこと、と同レベルの視角において漱石が運命的に再生し、この書収録の第二次「漱石試論」としてその思索の延長に『日本近代文学の起源』の成立を促すことに必然性がある次第は、「あとがき」に氏の記すところである。

マルクスを読むように、私は漱石を読んできた。つまり、マルクスも漱石も、けっして私が「研究対象」として選んだものではない。

厭になれば読まないし、たとえば漱石については、もう書く気がしないと公言していた時期もある。ところが、どういうわけか、そこに戻ってくる。それらは、私が折りにふれてたちかえり、自分の思考を確認するテキストであるだけではない。むしろ、それらを「読む」ということにおいて、私の「思想」なるものは存在しないのである。しかし、なぜそれらが特権的なテキストとしてえらばれているのかは、私にはわからない。私がそれを選んだのではなく、それを選んでいることが「私」なのだから。

氏の思考が、マルクスのテキストにおいて自己展開する。それがテキストとしてマルクスを「読む」ことである。同様に、漱石に「なぜ」をたどることが、自己の課題に次々に向き合う体験となることを、氏はへ私がそれを選んだのではなく、それを選んでいることが「私」なのだからと表現する。ここでいうへ漱石については、もう書く気がしないと公言していた時期とは、氏の思索の視角の内から外へと転換する事態の生じた七五―七六年の時期であり、へところが、どういうわけか、そこに戻ってくるへところに見いだされたものこそ、氏の第二次「漱石試論」の新しい視角である。

そして、それにづく「あとがき」の、へつけ加えていえば、漱石論のなかで言及した日本における「風景の発見」という問題へこそが、『日本近代文学の起源』のキィ・ワードをなす視点であり、へその意味でも本書は「序説」であるへという表明は、氏の論究姿勢についての自己解説として、氏の明確な視角転換を語っている。これは「漱石試論」に即して言えば、漱石の原質を内面へと掘り下げた視角の極限から、一転して、ここに、漱石の文学的実質を時代との相関において

とらえ直す外的透視的な思索角度への転換が図られることにほかならない。

#### ◆階級について―漱石試論―

漱石の内面について形象化されたモチーフによる「地底の世界」が、「階級について」と改題されたことは、すでに氏の思索が、漱石の原質探求から漱石の営為の意味の考究へと向けられていることを明らかにしている。

「漱石とは何か」より「漱石はいかにして漱石か」への視角の転換である。いかに深く漱石の原質を洞察しようとも、深刻な人型の深い穴を掘り進む出口の閉ざされていることが、氏の思索上の見きわめであったに相違ない。「地底の世界」での「坑夫」の内的意味づけは、一転して「階級」という外的な視点に引き継がれて氏の新しい照射視角となったわけである。この改題そのものが、時代と相関しない漱石についてはもはやへ書く気がしなくなった氏の、思索の方向を示している。もちろん、『畏怖する人間』に収録された第一次「漱石試論」よりほぼ七年の歳月が流れて、この第二次「漱石試論」が『マルクスその可能性の中心』中に収録され、その思索領域に属しているのがその背景である。

その論的視角の方向転換は、まず、その論の冒頭に次のように記される。

十年近く前に漱石論を書いたとき、私の論考の鍵となったのは、『坑夫』という作品である。そこでは、外界を喪失し、且つ、人格的な統一性をうしなつた人物が地底に降りて行き、闇のなかを彷徨

する。当時の私にとって、この「地底」はむしろシンボリックなものであり、したがって、この作品はそれ以後の長編小説の内的な構造を直接的に示唆するものと思われたのである。しかし『坑夫』に関して、私は今ややちがった見方をしてゐる。このちがいはおそらく漱石論全体に影響せずにはいられないような性質のものである。むしろ私はいまあらためて漱石論を書くという意欲はない。ここで書くとうとするのはかつての自分の思考に対する異和感であると同時に一つの予感のようなものにはすぎない。

これは、へむろん私はいまあらためて漱石論を書くという意欲はない」といふ氏によって書かれた風変わりな「漱石試論」の書き出しである。事実これは「漱石」論と名付けるには適當とはいえない。というのは、ここでは、時代の外的な力としての生産様式の変化の果たすもの、「階級」についての意識が、漱石にどう現れていたかに関し触れてはいるものの、むしろ対比の対象として有島武郎の場合に多く筆を費やしている変則性がみられるからである。ただ氏にとっての最も重要な論旨は、かつて自らが論じた漱石試論「意識と自然」及び「内側から見た生」の視角の明確な撤回の意思表示をここに果たすことであつた。従つてそこを通過するにおいてのみ、氏の論的転換を示し得るといふ意味での決定的な漱石論といえる。へここで書くとうするものは、かつての思考に対する異和感であると同時に一つの予感のようなものにすぎない」といふ氏の模索の視点、へおそらく漱石論全体に影響せずにはいられないような性質のものであることを予告することにおいて、この「階級について」―漱石試論―は、新しい漱石論の視角を設定している。



その次第について氏は、へ私にはいま、漱石論を書いていた六〇年

代がある距離をもってみえるような気がする。いいかえれば、私から外界をうしなわせていたその時代の性質を「外側から」みることできるような気がするのだ。私が想起するのは六〇年代初めに安保闘争とならんで、実はもっと重要な意味を帯びていたかもしれない出来事、すなわちその結果として「坑夫」あるいは「地底」を日本からほとんど消滅させることになった三池闘争である。それは石炭から石油への切りかえを象徴する事件だった。それは風景・事物・生産関係を激しく変えたのであり、われわれはなにか手応えのない、不確かでありまゝいな現実をもったのである。だが、私にはいま、ある苦々しさをもって一つの逆説、つまり意識が存在を規定するのではなく、存在が意識を規定するという逆説に同感せざるをえない。なにも問題を難しく考える必要はない。われわれが精神上蒙ったもろもろの変化は、「石炭から石油へ」という生産様式の変化に集約されるのだ、と。と述べ、この氏自身の時代の中の自己把握、時代性の人と与える外的な決定力への関心が、そのまま世界への氏の確かな視角となることを示唆している。へ私にはいま、ある苦々しさをもって一つの逆説、つまり意識が存在を規定するのではなく、存在が意識を規定するという逆説に同感せざるをえない」と吐露し、氏の痛切な思索体験として提示される時代性の決定力が、氏の視角を転倒させ、漱石論が、既に時代固有の「現実」とのかかわりの中でしか成立し得ないことを、氏は自己の新しい視角として語るのである。時代の意味を担った「地底」である「坑夫」を、漱石は予感したであろうが、へまた古典的な知のなかに属していたために、その時代性に即して十分に意識してはいなかつ

たろうと、氏は指摘する。

へ漱石にとって、「地底」は市民社会から排除された者が行くところであり、したがってたんに「苦痛」の場所である。だが、観点を変えれば、そこはまさに「快感原則」の世界なのだ。漱石は、あるいはそのことに気づいていたかもしれない。だが、彼は「地底」から逆に市民社会を見ようとはしなかった。私がそういう視点を見出すのは有島武郎の作品においてである。へ

漱石にとって、「階級」は予感におわっていたという。そして、

へ有島にとってプロレタリアートという観念は、社会主義からきたのではなく、彼自身によるキリスト教の転倒からきたのだへおそらく有島は最も深刻にキリスト教に内面を喰い破られた人間であり、それを転倒することが「書く」ことに結実していった唯一の作家だといつてさしつかえない。へむろん、イギリスから帰ってきた漱石も、キリスト教であれ儒教であれ、中産階級の「意識」を占めているモラリティへの呪詛をひそかにもらしている。へ

漱石がへ「二個の者が、same space を occupyする訳には行かぬ」というのは、たとえば「愛は惜しみなく奪う」という有島の認識に対応している。たぶん有島は漱石から何の影響もうけなかったが、その嫌悪はある認識を共有しているがゆえに生じたのである。この関係は、いくらかショーペンハウエルとニーチェの関係に似ている。ショーペンハウエルは、≪三を、世界および自己の根底にみとめた男であり、同時にそれを恐れて扼殺しようとした男である。漱石も必死にそれを殺そうとした。そして、彼が実際の肉体的衰弱をその克服ととりかへたとき、「則天去私」という神話ができたのである。へこ

の神話は一九五〇年代に、江藤淳によって破壊された。だが、やがて圧倒的にふくれあがった新中産階級によって、新たな神話が形成されたのである。それは、「地底」の消滅の結果にほかならない。この神話はもはや「則天去私」など信じない。しかし、それは、漱石の苦悶、葛藤、不安、恐怖を抽象的に昇華した上で、それを人間存在の普遍的な姿として見出すのである。さらに、こうした非歴史的思考は、同時に、それ自身の歴史性を問わない歴史主義的な実証主義によって補完されている。私が神話とよぶのは、漱石論の基底にある相補的イデオロギーである。漱石論の再考は、われわれがその上にある知的地盤そのものの解体を迫るのである」と、氏はこの論考を結んでいる。

この第二次「漱石試論Ⅰ」において、氏はすでに漱石の内面の個別を追究する視座を降りている。「漱石」は注視対象にかわりないが、あくまでも「漱石がどう生きたか」においてである。有島武郎への論及は、対比によってひたすら「漱石」を語るための「戦略」であるという言い方は正確ではない。漱石の時代を生きた意味において、それをめぐる時代人はどうであったかという拵がりに、氏の主題的視野が移行しているからである。―同時代人有島の生き方とは本質的に何であったかという把握において、「漱石」も照合される。それを時代との拘わりの中で明知することは、氏の生き方の認識と重なるものである。

ここでは、かつて「則天去私」という神話の「破壊」に真実を見出した氏が、今、「文学」史的成果の安定のもとに「人間存在の普遍的な姿」として、「歴史主義的な実証主義によって補完された」へ「非歴史的思考」により形成されていく漱石の「新たな神話」を、自

らの属する「新中産階級」の否定的テーゼとすることで、「漱石試論」に、いま一つの可能性を予見しているのである。それは、固有な漱石論の定説化を超えてのみ「漱石」を照射し得るといふ視角の獲得であり、氏を含むわれわれの依拠した登録的な「知的地盤」そのものの解体を策すことである。

かくして、「文学について」―漱石試論Ⅱの「漱石と文学」からの改題もまた、自らの主題の赴くところ「漱石にとって文学とは何であったか」を一つの核としながら、「その時代における文学の本質的あらわれ」を明晰に論究する意図を示していると言える。そして、この「文学について」の思索が、直接的に『日本近代文学の起源』にとつての原型をなすのであり、その本体の視角をいかに見極めるかについては、この漱石試論Ⅱとの相関の解明とともに、いまは別稿に委ねるほかない。

このような「漱石試論」の成熟の経緯に成立した『日本近代文学の起源』は、氏の必然的な視角の転換により、時代性の基底に及ぶ氏の思索の明証性を、新たに語り出す斬新な装置として目前にある。

(92・6・20)

注1 「柄谷行人&高橋源一郎」